

# エンカウンター (ENCOUNTER)

## 第 19 号

平成15年11月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

印刷・発送人 〒285-0844 佐倉市上志津原 34 佐藤れん

電話 043-487-7030

### 内村鑑三「一日一生」より(3)

4月16日

兄弟たちよ。苦しみを耐え忍ぶことについては、主の御名によって語った預言者たちを模範にするがよい。忍び抜いた人たちはさいわいであると、私たちは思う。あなたがたは、ヨブの忍耐の事を聞いている。また、主が彼になさったことの結末を見て、主がいかに慈愛とあわれみに富んだ方であるかが、わかるはずである。

(ヤコブ書 5・11 - 11)

患難を避けしめたまわない。これに陥(おちい)らしめたもう。しかしてその中より救い出したもう。患難をして充分に働かしめたもう、火をして焼きつくすだけを焼きつくさしめたもう。しかしてその中より救い出したもう。患難を避くるはこれに勝つの道ではない。患難はこれにあたり、一たびその呑むところとなりてのみ、ついによくこれに勝つことができる。これが真正(ほんとう)の救済(すくい)である。死は死によりてのみこれを滅ぼすことができる(ヘブル書 2・14)。患難は患難の中をとおらずして、これに勝つことができない。神は信者を患難の中より救い出したもう。しかして完全に彼を救いたもう。

4月24日

だから、私の神への奉仕については、キリスト・イエスにあって誇りうるのである。わたしは、異邦人を従順にするために、キリストがわたしを用いて、言葉とわざ、しるしと不思議との力、聖霊の力によって働かせて下さったことの外には、あえて何も語ろうとは思わない。こうして私はエルサレムから始まり、巡りめぐってイルリコに至るまで、キリストの福音を満たしてきた。その際、わたしの切に望んだところは、他人の土台の上に建てることをしないで、キリストの御名がまだ唱えられていない所に福音を宣べ伝えることであった。(ローマ書 15・17 - 20)

われわが事をなすにあたりて富豪の寄付を仰ぐをもちいず、われの仕うる天の父は天地万有の造り主なり。われわが志を伸(の)ぶるにあたりて社会の賛同をうるを要せず、われの友なる天使は宝座(みくら)に近くわがために祈る。われに糧(かて)あり、聖書にあり。われに力あり、祈祷に存す。われは単独にして世界を相手に戦いうるなり。

4月25日

主を恐れることは知恵の教訓である、謙遜は、栄誉に先だつ。(箴言 15・33)

謙遜なれ、柔和なれ、されど意気地(いくじ)なしたるなかれ。謙遜は勇気なり、されど意気地なしは卑怯なり。二者その外貌において相い似て、その内容において全く相い異なる。しかして余にいわゆるキリスト的謙遜なるものにして、卑怯の結果なるもの多し。われらの謙遜をしてありあまるの能力(ちから)を有する者の謙遜ならしめよ。世の圧迫を怖れて萎縮(いしゆく)するの謙遜(退縮)ならしむるなかれ。

5月3日

あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には、すまいがたくさんある。もしなかったならば、わたしはそう言っておいたであろう。あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから。そして、行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである。(ヨハネ伝 14・1 - 3)

この世における余の生涯はどうでもよい。憎まるるもよい、誤解せらるるもよい、貧しきもよい、裸なるもよい。世の永久の運命はこの世における余の境遇によって定められるものでない。余の運命を定める者は、余のために自己(おのれ)を棄てたまいし余の救い主イエス・キリストである。彼は余のためにところを備えんために、父のもとに往きたもうた。彼はまた来たりてなんじらをわれにうくべしと約束したもうた。余はこの世にありては遠人(たびびと)である。暫時の滞留者である。余は一時天幕をこの地に張る者である。永久の住家(すみか)を築く者ではない。神が余を呼びたもう時には、ただちに天幕の綱を絶ち、これをたたんで彼の国へといそぐ者である。

5月10日

そこで、あなた方に言うておくが、神の霊によって語るものはだれも「イエスはのろわれよ」とは言わないし、また、聖霊によらなければ、誰も「イエスは主である」と言うことができない。(コリント第1書 12・3)

聖霊は神が人類に賜う最大の賜物である。しかし賜物であるからというて物ではない。触(ふ)れ、量(はか)り、分析することのできるものではない。霊は気である、勇気である、正気である、道徳的感化力である。聖霊をみたまとよんで、遥玉(ようぎょく)のさらに精化したる者であるかのように解するのは大いなる誤りである。聖霊は霊である、ゆえに気である、精神である、生命(いのち)である、心である、情である。ゆえに道徳的感化力としてわれらに臨み、その中に愛を生じ、信仰を起こすものである。聖霊に鳩の形もなければ、焰(ほのお)の熱もない。われらはただこれをわれらの霊の力、光、生(いのち)として感ずるまでである。

5月27日

しかし、信心があって足りることを知るのは、大きな利得である。わたしたちは、何ひとつ持たないでこの世にきた。また、何ひとつ持たないでこの世を去って行く。ただ衣食があれば、それで足りるとすべきである。富むことを願い求めるものは、誘惑と、わななどに陥り、また、人を滅びと破壊とに沈ませる、無分別な恐ろしいさまざまの情欲に陥るのである。(テモテ第1書6-6-9)

なんじの今日の業(わざ)に安んぜよ。まず大事業をなすの念を抛棄(ほうき)せよ。エレミヤ、その弟子バルクをいましめていわく、「なんじ、己のために大なることを求めるか、これを求むるなかれ」(注)と。われらおのおの社会の教導者たらんことを欲するがゆえに、われらの革新事業は拳がらざるなり。われら各自に革新すべき区域の供せられしにあらずや。なんじすでに安心立命の位置に立ちしとせんか、さらばまずなんじの家族におよぼし、なんじの友人を教化せよ。なんじの隣人に慰謝(なぐさめ)の清水一杯を与えよ。なんじに至る貧者をして、なんじより善をほどこされずしてなんじの門前を立ち去らざらしめよ。われに勤めんとするの精神あらんか、われの今日の位置において、なすべきの業は積んで山をなせり。

注 エレミヤ記 45・5

7月24日

わたしはなまけ者の畑のそばと、知恵のない人のぶどう畑のそばを  
通ってみたが、いばらが一面に生え、アザミがその地面を多い、  
その石がきはくずれていた。わたしはこれを見て心をとどめ、こ  
れを見て教訓を得た。(箴言 24・30 - 32)

イエスは労働者である。世は彼によりて労働の貴きをゆえんを知  
った。労働は賃金をうるために尊いのではない。心を養うために貴  
いのである。煩悶と懷疑とは沈思黙考によりても解けない。労働に  
よりて釈(と)ける。労働の人生におけるは、排水溝の沼地における  
がごときものである。これによりて悪水は除かれ膏腴(こうゆ)は残  
り、地は豊穰(ほうじょう)を供するに至る。煩悶は、思うこと多く  
して働くこと少なきより起こる。煩悶を除かんがために身を噴火口  
に投ずるに及ばない。通常の労働に従事すれば足る。されば糸のご  
とく乱れたる心は整理について、賛美の声は口よりあがるに至る。

8月21日

しかし、わたしは主を仰ぎ見、わが救いの神を待つ。わが神は、わたしの願いを聞かれる。わが敵よ、わたしについて喜ぶな。たといわたしが倒れるとも起きあがる。たといわたしが暗やみの中にすわるとも、主はわが光となられる。主はわが訴えを取りあげ、わたしのためにさばきを行われるまで、わたしは主の怒りを負わなければならない。主に対して罪を犯したからである。主はわたしを光に導き出してください。わたしは主の正義を見るであろう。  
(ミカ書7・7-9)

日に三たびわが身をかえりみる、とは儒教の道德なり。その常に退歩的にして、保守的にして、萎縮的なるは、自抑内省をもってその主(おも)なる教義となすによらずんばならず。なんじらわれ(神)を仰ぎみよ、さらば救われん、とはキリスト教の道德なり。そのつねに進歩的にして、革新的にして、膨張的なるは、信賴仰望をもってその中心的教理となすによらずんばならず。パウロいわく、善なる者はわれすなわちわが内におらざるを知ると。われら自己(みずから)をかえりみてただ慙愧(ざんき)あるのみ、失望あるのみ。新希望と新決断と前進向上とは反省回顧より来たらざるなり。